

---

# その頃誰もがバカだった

ハスキー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その頃誰もがバカだった

### 【Nコード】

N6419T

### 【作者名】

ハスキー

### 【あらすじ】

緊張することなく、受験のストレスを感じることもない、中学生生活で一番バカをやれる中二。そんな中二の代表みたいな友人にツッコミ続ける日々を送る柳谷統夜。彼らに呆れつつも、楽しいと思う統夜もバカの一人。だってその頃は、誰もがバカだったのだから。

## 第1話・中二（前書き）

こんな中学生いないだろう、と思うかもしれませんが、暖かい目で読んでいただければ幸いです。そして笑っていただければなお嬉しい限りです。

## 第1話・中二

世の中には中（厨）二病という言葉がある。主に痛い方々に使われるらしい。よく知らないが要は中二が一番ぶっ飛んでてバカつてことだろう。まあその評価を俺は否定しない。少なくとも俺の周りではそれは限りなく事実だからだ。

「大艦巨砲主義！　大は小をかねる！　やっぱ巨乳が一番だろ！」

「柏原、君はやはり時代遅れだな。世はちつぱいブームだ。胸は無ければ無いほどいい」

「んなもんオタクだけだろ！　今も昔も変わらない魅力が巨乳にはあるんだよ！」

俺の目の前でアホな議論で火花を散らしているのは、残念ながら幼なじみである。

巨砲主義のいかにもスケベそうなのが柏原湧かしはらいさむ。中二と言えばこんなというのを地でいくバカである。

で、まな板に豆主義なのが原田政明はらだまさとあき。アニメに関する英才教育を受け、オタクを地でいくバカである。

そして俺が柳谷統夜。暴走する友人達にツッコミを入れる苦勞人。では柳谷氏。君はどう思う？」

「そうだ、さつきからだんまりはするいぞ！」

何がずるいか全然分からん。でもこんな議論に真面目に参戦する気も毛頭ない。てか…

「オーピングから何とんでもねえ議論繰り広げてんだお前らはっ！」

いきなり下ネタから入ったらもうネタ無いのかと思われるだろ！「仕方ねえだろ。中二なんて下ネタくらいしか考えることねえんだから」

もっと他に考えることあるだろ。自分の中二観だけで語るんじゃ

ない。

「下ネタとは心外だな。僕が語っているのは現代における女体の神秘の追求…、いわば芸術なのだ！」

盗撮見つけた時の言い訳にしか聞こえない。お前のフェチイズム何か芸術評価してもらえるか！

「下ネタにしる神秘の追求にしる、他に話すことねえのか？ 勉強のことか」

勉強というワードに柏原は明らかに難色を示した。こいつは滅茶苦茶勉強が嫌いなのだ。

「俺は分数で数学を諦め、そしてb e動詞で英語を諦めた男だぜ？ 勉強で語ることなどない！」

分数は算数の範囲です。

「同感だな。そんなことに脳の容量を使うなら、一つでも多くのゲーム、アニメを網膜に焼き付ける！」

ダメだこいつら。進路先は確実にバラバラだろうな。別に俺が頭いいと言ってる訳ではないが、ここまで勉学を軽んじていない。

「まあ中三から頑張ればいいんだよ。高校が見んのはそっからの成績なんだからよ」

悪いが中三から勉強頑張る柏原を全く想像出来ない。

「よっぽど優秀な家庭教師とワンツーマンくらいしなきゃ無理そうだな」

「え、美人家庭教師とワンツーマン！？」

誰も美人なんて言っていない。

「やべえな、勉強どころじゃ無くなるぞおい！」

柏原の頭の中では既に美人家庭教師が来ることになってるらしい。「心配する必要はない。既にそのパターンは経験済みだ」

「マジか！？」

「ゲームで」

「やっぱりかよー！」

勉強が脳の容量の無駄とか言ってる奴に、家庭教師なんてもった

いなくて雇ってられんなわな。

「貸してやるうか？」

「…お願いします」

「借りるんかい！」

思わず声出してツツコンじゃったよ！

「ち、違うからね。別にエロいの期待してるわけじゃないからね」  
よしエロいの期待してるんだな。心配しなくても、お前はそういう奴だっと思ってるよ。

つかまだ中二なのにエロいゲームが手に入るわけが…。

「ネットショッピングで年齢偽って手に入れた。柏原氏の期待に応えられるだろう」

「応えちゃダメだろ！」

宅配の兄ちゃんも年齢確認しようぜ！      酒とかタバコは厳しく年齢確認するくせに！

まあ宅配の兄ちゃんが酒タバコの確認してるわけじゃないけど。

「つか柏原の姉ちゃんって大学生だろ？      家庭教師してもらえばいいじゃん」

第一話で実はもへったくれないが、柏原には姉貴がいる。確かそこそこの大学に入ったはずだ。

「お、恐ろしいこと考えるんじゃない！      姉貴に勉強教えてもらったら、条件に何を言い出すか分かったもんじゃない！」

俺や原田の前では普通の優しいお姉さんなのだが、弟の前では違うらしい。

「だからこそ、ゲームで夢を見ればいいんだ。美人家庭教師とのシチュエーションは誰もが憧れる」

いや、憧れた覚えがない。

「実際に家庭教師頼んだって男が来るか中途半端な女が来るに決まってる！」

失礼なこと言うな！

「ならゲームの中でくらい、好みの美人家庭教師で教えを請いたい

じゃないか」

二次元至上主義のお前なら大満足だろうが、三次元至上主義の柏原は微妙だろう。

「そうだな…。姉貴に頼むくらいなら、せめてゲームで夢見るか」  
あっさり陥落してる！？

「落ち着けえっ！　そもそも家庭教師なんか例え話なんだから、他に勉強法を考えりゃいいんだ！」

「あれ、勉強する話だっけ？」  
どうして二人共疑問符付けて返してくるかな！？

「俺は家庭教師でも付けなきゃお前は勉強しないだらって意味で言っただ。なのに美人家庭教師がどうのと勝手に妄想宣いやがって

…」

と、愚痴っているのに関わらず、柏原はポカンとしていた。

「…宣うってなに？」

俺は言葉を失った。ああ、中二だし普通分らないよな。

「辞書引け」

「持ってない」

だからお前はアホなのだっ！

「とにかくもう帰ろう。夕方六時代のアニメが始まってしまっ」

君の世界の中心はアニメか！

そっだ！…と即答しそうで怖い。

「ちっ、中学生にもなって六時に家に帰りやがって…。付き合い悪いぞ」

帰宅部の俺らにとっちゃ妥当だろ。つか放課後から二時間以上話してた計算になるから、充分付き合いはいい方だと言える。

つかそんなに中学生らしいことしたいなら…。

「じゃあ校舎の裏で煙草でもふかすか？」

「見つければ逃げ場もない。って尾○豊か！」

来年なら丁度良かったんだけどな。

「俺はそんな前時代的な中坊になりたかねえんだよ！」

いや、下ネタに走る当り充分前時代的な中坊だよ？

「では中坊のニュータイプたる僕は忙しい。失敬する」

そう言い残して原田は帰っていった。タバコにハマるよりアニメの方が健全かもしれないが…。

「何がニュータイプだ。仕方ねえ。エロ本落ちてないか探しながら帰るか」

落ちてるエロ本探すってタバコ以上に前時代過ぎるだろ。

とかく俺と柏原は帰路に着いた。

思考の極端な奴二人に挟まれ、気苦労の多い毎日を送っているが、案外嫌いじゃない。

それはやっぱり、俺自身もバカだからだろう。

## 第2話・両親

どうも統夜です。落ちてる工口本を発見出来ず意気消沈の柏原を元氣付け現在19時…。普段18時半には帰宅してる俺にとっちゃちよつと遅い帰還だ。まあ俺の親に限って小言聞かされることは…。

「統夜！ 何時だと思ってるの！」

あった。珍しく母さんが玄関で仁王立ちしている。

何回か19時回った時があったがキツく言われたことなかったのに、今日に限ってどうしたもんか。

「ただいま。現在の時刻は19時3分だ」

「あらそう。ご飯もうすぐ炊けるわね」

怒ってたのにご飯の心配？ 十年以上この人と親子やってるが、未だに精神構造が分からん。

「とにかく荷物置きに行つていい？」

「どうぞどうぞ…って待ちなさい！」

小言言つてたこと思い出したのだろうか。

「一回遅くに帰ってきた息子を叱ってみたかったの。ありがとう」  
実の母親が親指立てて極上スマイルを見せてくれた。さて、19時は「遅い時刻」に含まれるのか。息子を叱ってみたかったってどんな神経してんだ。等々ツツコミどころがあるが、無視して部屋へ上がった。

かばんを部屋へ投げ出しリビングへ足を運ぶ。

全く、家に帰ってまでツツコミ役したかないっての。

「ただいま」。我が家の大黒柱のお帰りだぞ」

父さんが帰ってきたか。今日はやけに早いな。

「おう、我が息子よ。帰つてたか。だが中二になったことだし、道草してタバコふかすぐらいしろ」

「あんな百害あって一利もないもん、吸う奴の気がしれないね」  
自分の息子に何喫煙推奨してんだ。似た者夫婦って言うか…、と

かく両親共にボケだから俺の休まる暇がない。

「百害あつて一利無し…か。諺なんか使いやがって、品行方正にも程があるぞ！」

品行方正の何が問題だと言つのだろうか。確かに柏原と比べると真面目な方なんだろうけど。

「でもあなた、統夜つたら今日19時過ぎに帰ってきたのよ」  
「なにいつ！」

母さんめ、余計なことを…。

「その調子だ。たまには親らしいことするために、どんどんやれ」  
何故に両親共に息子の非行を喜ぶのかね。まあちよつと帰るの遅くなった程度だけど。

「ようし今日は統夜の門限突破祝いだ。母さん、大盤振る舞いにしてくれ」

「じゃあベーコン焼こうかしら」

シヨボっ！ おかず一品増えただけじゃん！ つかうちに門限なんて無いだろ。あと門限突破祝いつてなんだ！？

「ベーコンか。塩コシヨウ振りまくつたら酒の当てになるかね？」  
未成年の俺に聞くな。

「知らないけど、塩分取りすぎで生活習慣病へ大きく前進しそう」  
父さんは自分の腹部を見て台所へと消えた。

「鯖の塩焼きか…」

「ええ」

「塩分控え目だな」

「あら？ いつも塩辛くないと酒の当てにならねえって言ったなかつた？」

「…いや、最近味覚変わつてな。薄味でも吞めるようになった」  
「そう、分かつたわ」

あ、戻ってきた。そして自分の腹部を見つめ、明らかに落胆し座

った。

「若い頃は無茶しても平気だったのになあ…」

どうやら中年には中年なりに悩みがあるらしい。話の流れからして、塩分過多を注意されたんだろう。

「つかどうして塩分ねえと酒が進まねえんだ？ 別にケーキとビールでも…。いや、これは無いわ」

居酒屋でケーキを当てにビール飲んでるリーマン居たらシユール過ぎる。

「鯖焼けたから、配膳手伝って」

「よっしゃ行つてこい統夜！」

「へいへい」

俺は腰を上げて台所へと赴く。魚の焼けた良い匂いが俺の鼻腔をくすぐった。

「ご飯もよそつて持つてくよ」

「ありがとう。本当に私たちの子供が疑いなくなるくらい、出来た子ね」

「そこは自信持つてよ」

反面教師の賜物だから…とは言わぬが花つてね。

お盆に乗せテーブルへと運び配膳していく。家族三人分並んだところで、父さんが音頭を取る。

「んじゃいただきます」

「いただきます」

やつぱ魚と白米は合うな…。

父さんは大人しく鯖をつついていいる。だが震えているような…。

「ええい！ 生活習慣病がなんだ！ 俺は太く短く生きるんだあつ！」

父さんはそう叫んで冷蔵庫へダツシュした。

そして手にしたのは缶ビールと塩コショウの瓶。もはやアルコール中毒じゃん。肝臓に癌が出来そうで心配だな。

「統夜、塩分取りすぎたらどうなるの？」

「血圧上がる」

「うつ！」

父さんの塩コシヨウを持った手が止まる。

「まあ、血圧上がったらどうなるのかしら」

「動脈硬化して、そうなった場所によって色んな病気が起こるね」  
「うつ！」

ああ、悩みが無限ループに入ってるみたいだな。

「さらにお酒何か飲んだら大変じゃない？」

「動脈硬化に関係してるか知らないけど…」

あ、塩コシヨウ置いて缶ビールに手を伸ばしやがった。

「発癌率は跳ね上がるね。父さんタバコも吸うし」

「チクシヨオオオオっ！！！」

父さんは雄叫びを上げ缶ビールを握り潰した。

って何やってんだこの人！？

「母さんタオルタオル！」

母さんは直ぐにタオルを用意し、こぼれたビールを拭き取りにかかった。

カッターシャツのまま父さんは食事をしていたので、右裾はびしょびしょ。脱衣場に直行した。

「ちよつと追い詰め過ぎたかしらねえ…」

母さんは申し訳なさそうに脱衣場を見る。

父さんは日本人にしては酒強い方だ。その代わり内臓脂肪付きやすい傾向にある。まあ結果オーライかな。

ビールを拭く母さんを手伝いながらそう思った。

### 第3話・姉貴

よう、柏原湧だ。残念ながらエロ本は見つけられなかったがまあいい。家にある奴で我慢するか。とある事情で家には俺しかないはずだしな。

「ただいま〜と」

ま、誰かいるわけないけどな。父さんは国際ジャーナリストで海外飛び回ってて、母さんは父さんについていつている。

つまり俺と姉貴の二人暮らしってわけだけど、その姉貴も今はバイト。俺の天下だぜ。

「お帰り、遅かったわね」

俺の天下一瞬にして崩落。つか何で、どうして、why!?

「どうして姉貴がここに!？」

「ん〜？ 何かバイト無くなっちゃってさ。店長がミスってシフト入れ過ぎちゃったみたい」

みたい…じゃねえよ！

これじゃおちおちお宝本観賞も出来ないじゃないかよ…。

「全く、世界でただ一人血を分けた姉弟だったのに、そんなに絶望することないでしょうよ？」

ちっ、まあ姉貴がバイト入る日なんていくらでもあるだろ。お宝観賞会は次に取っとくぜ。

「ああ、そうそう」

「ん？」

「あんたのお宝本、すぐ見つかりそうだから場所変えてあげたから」

………？

えっとお宝本の隠し場所が見つかって、姉貴は親切に場所変えてくれたのか。

「そつか、ありがとな」

「なんのなんの」

って…。

「アホかあああつ!!!」

何処の世界に弟のお宝本の隠し場所変える姉貴がいるんだよ！  
とにかく確認せねば！

俺は階段を駆け上がり、二階の自分の部屋に飛び込んだ。  
そして隠し場所を確認する。

「そんな…。マジで無いじゃん…」

俺は膝を落とし落胆した。雨の日、薄暗い中輝いて見えた一冊の本。まさに“お宝”と呼ぶに相応しい 光を放っていた。そんなお宝本を集めウンケ月。まさかもうお別れの時が来ようとは。

…いや、まだだ。

まだお別れには早すぎる。諦めたらそこで観賞会終了。先生…。  
俺、まだ観賞したいです！

「ああああねええきいいいっ!!!」

俺は一気に階段を下り、姉貴に詰め寄った。

「俺のお宝本はどこだあああつ!!!」

「お宝は自分の力で掴み取ってこそでしょっ!! 自分で何とかしなさい!!」

そうか！ 確かに自分で見つけ出したお宝本だからこそ愛着が生まれたと言っても過言じゃねえ。

よっしゃ絶対見つけ出してやるぜ！

「そんなことよりご飯にしない？」

俺は姉貴の気の抜けるような台詞に躓き、そしてテーブルの脚に足の小指をぶつけた。

「ぎゃあああつ!!!」

急所の次に痛い身体の部位だよここ！

「一人で何悶えてるの？　妄想でも大丈夫な口？」

「ぐうう…。お、弟を勝手にそんなマニアックな道を走らせてんじやねえ…」

しかもそんなゴミ見るような目で。

「いやあ、お宝本無い頃は妄想でも大丈夫だったんじゃないかと」  
んなわけあるかあつ！

少なくとも俺は視覚が満たされねえとダメなんだよ！

「まあ腹が減っては戦は出来ぬ。お宝本探しはそれからいいでしょ。パパッとパスタ作っちゃうから待ってて」

そう言つと姉貴は台所に行った。勝手にお宝本の場合変えて、勝手に飯にしようとしやがる。本当に勘弁してほしいぜ…。

けど飯作る間に探すことは出来る。さっそく搜索といくか。

取り敢えず自分の部屋だな。俺はまた二階に上がった。

自分の部屋を冷静に見渡すと散らかっているのがよく分かる。場所を知ってる俺はともかく、何故姉貴はこんなごみ溜めからお宝本だけを見つけ出せたんだ…？

姉貴の奴、最初っからお宝本狙つてやがったな。

何にせよ、部屋片付けないことには搜索どころじゃねえな。掃除するか。案外その最中に見つかるかもしれないし。部屋が綺麗になつてお宝本見つかりや、まさしく一石二鳥だぜ。

こうして俺は掃除を始めることにした。

脱ぎ散らかした服はまとめて洗濯機だな。いつ着たかも分からねえのばっかだし。

いらねえプリントも全部捨てちまえ。中一の頃のテスト？　もちろんいらねえプリントの一つだ。まあ奇跡的に五十点超えた理科のテストと保健体育のテストは残しておくか。もう二度と五十点なんて超えねえだろうしな。

あ！　昔のジャ。プじゃねえか。三ヶ月に一回のペースで大体

廃品回収行きだが、残ってた奴があつたのか。  
へえ〜…。

「ご飯出来たよ〜」

「あいよ〜。って…」

しまったあつ！ 思わずジャ。プ読み耽っちまった！ 俺の

一石二鳥の計画が…。

まあいい。ひとまず飯食って今後の掃除&お宝本搜索に備えるか。

下に降りると待っていたのはミートスパゲティだった。シンプル  
なだけに食べ安いから、早く食い終わる。

「んじやいただきます！」

フォークでパスタを巻き、口へ運んでいく。

「あ、間違えて唐辛子の粉末入れちゃったけど大丈夫だよな？」

もちろん俺の手は止まった。舌の痛覚が刺激され、汗が流れる。

「ぎゃあああつ！！！」

大丈夫なわけあるかつ！

水を一気に飲み干し姉貴を睨む。

「何しやがんだ！」

「ドジっ娘萌え？」

もう二十歳のくせに何がドジっ“娘”だ！ なんて言ったらど  
うなるか分かったもんじやないから、思うだけで止めておく。

「んなもん現実にやられても迷惑なだけだろうが」

「そっかあ。萌えなかったか」

んなとこ問題にしてねえよ！ つか何残念そうにしてんだよ！  
姉貴に萌える弟が現実にいるわけねえだろ！

「まあ頑張つて食べてね。私も頑張るから」

フォークでパスタを巻き、姉貴は口へと運んだ。

「かっつっらつ！！！」 なにこれ、何スコビルあるの？」

「知るか！」

ちなみにスコビルつてのは辛さの単位のことな。

火を吹きながらも何とかスパゲティを完食し、俺はお宝本搜索に戻った。

…が、全く見つからねえ。まさか俺の部屋じゃねえのか！？

「ようやく気付いたみたいね」

「姉貴…」

「そう、実は私の部屋にあるのよ！」

それを聞いた瞬間、俺は枕を姉貴に投げつけた。顔面にまともにくらい、固まっている姉貴を尻目に、俺は姉貴の部屋に突入した。

俺のお宝本は机に置かれていた。

「こっちの方がマズイだろうがぁぁあつ！！！」

#### 第4話・委員長

ある日の午後からの授業。担任である尾崎先生がダルそうに入ってきた。

「はい席つけお前ら。今日のHRは来週の山登りの班決めだ。方法は委員長に任せる」

そう言う先生は一番後ろの空席に腰を下ろした。やる気の無さは天下一品だな。

そんな先生に代わって教壇に立ったのは伊藤綾<sup>いとうあや</sup>。才色兼備の優等生で我が二年一組の委員長だ。

「これから先生が仰っていたように、班決めをします。適当に五人集まってもらえば結構です。が、手元の資料には何故か男女混合と書いてます。早めの少子化対策でしょうか？」

いくら何でもそれは深読みし過ぎだろ。

「という訳で少し時間を取りますので、各自班を作ってください」  
委員長の言葉で皆は班を作り始める。

俺の周りは一言も声をかけていないバカ二人しか来なかった。

「ち、何かモテねえヤツとモテるヤツ分けられたみたいでムナクソ悪いぜ」

柏原はこう呟くが、実際はこいつの普段からの下ネタ発言に、ほとんどの女子が引いてる結果である。あと原田のマニアックさにも俺にしてみればとばっちりだ。

「予想通りこの三人が溢れてるみたいですね」

「みたいね」

そう言うてこちらにやってきた変わり者は委員長と、その友達奥<sup>おく</sup>井紗香<sup>くいさやか</sup>だ。

「一緒の班になってくれるのか!？」

柏原はさっそく二人の女子に飛びつく。さっきまで不機嫌は何処へやら…。

「委員長としては仲間外れを作るわけにはいきませんから」

「私はその付き添い」

よく見れば俺達以外は上手いこと班が決められている。

なるほど、委員長は溢れる俺達の救済策か。理解すると滅茶苦茶惨めな気分になるな。

「よく分からねえけど、よろしく頼むぜ」

こういう時柏原のバカさが羨ましい。ただ女子と同じ班になれるってだけで、舞い上げれるのだから。

こうして山登りの班は俺、柏原、原田、委員長、奥井となった。

柏原と原田のバカ話に二人が呆れないことを祈ろう。

HRが終わり、休み時間となる。意気揚々と隣に柏原が腰掛けてきた。

「いやあ、俄然楽しみになってきたなあ、山登り」

何がそんなに楽しいものか。年寄りの行楽じゃあるまいし、テンション上がらないっての。

俺と同じく意気消沈気味の原田もこちらにやってきた。

「全く理解に苦しむね、柏原氏。大艦巨砲主義の君が、ツルペタ三次元女子と群れることを楽しむなんて」

あれ、気掛かりなのはそっちですか？

「そりゃ巨乳の方がいいけどよ。さすがに中学生で巨乳はバランス悪いだろ。やっぱJCにはJCの良いところがあるってこった」

こっちはこっちで変な講釈垂れだした！

巨乳でも中学生でもいいって、もはや何でもアリだろ！

「そうですか。巨乳のJCはバランス悪いですか。嫌われましたね、紗香」

「いや、私別に巨乳じゃないけど」

意外にも柏原と原田のバカ話に首を突っ込んできたのは、委員長と奥井だった。

「うゝむ…」

さっきの委員長と言葉が気になったのか、柏原の視線は奥井のあ  
る一点に集中していた。

「ってどこみてんの！」

奥井の水平チョップが柏原の首に入った！？

まあ柏原に凝視ケタモノされたら水平チョップの一つや二つ入れたくなる  
わな。

「どうでした、柏原君？」

「服の上からじゃやっぱ分からねえわ……」

息も絶え絶えながらも、委員長の質問に律儀に応える柏原。

「じゃあプール開きをご期待下さいってところですね」

「だな……」

あの委員長が柏原と同レベルの会話をしているだと……。

「どうかしましたか？」

委員長は真っ直ぐな目で俺を見据える。

「いや、委員長がそんなこと言うなんて思ってたから」

たじろぎながらもそう言うと、委員長は小さく笑った。

「保健体育の成績も良いんですよ」

「さっきの会話、全く保健体育の知識入ってなかったでしょ」

ツッコミ取られた！？

なるほど、しっかりものの優等生かと思いきや、委員長ボケだな。

そして奥井がツッコミか。社会的役職とお笑いポジションが一致  
してねえ！

「ごめんね、柳谷君。幻滅させちゃった？」

「幻滅するほど仲が良かったわけじゃない。驚いたのは事実だけど」

伊藤は率先して委員長に立候補したし、奥井も彼女の仕事をよく  
手伝っている。まだ同じクラスになって一ヶ月しか経ってないが、  
少し先入観を持って彼女らを見ていたのは事実だ。

「せっかく同じ班なのですから、親睦を深めようと思ひまして」

そんな切り口では柏原と以外親睦を深められないぞ。

「……まあ少しはどういう奴かは知れたかな」

肩をすくめて俺はそう言った。委員長には奥井っていうツツコミがいるわけだし、俺の負担が増えることはないだろう。

「胸の話で盛り上がってましたから、イケると思ったんですが」  
いつかの会話（第一話）聞かれてた!？」

あの時の暴拳がこんなところに皺寄せが来るとは…。柏原と原田ぶん殴りたくなるな。

委員長と奥井とのマトモなコンタクトを逃したと思うと、やるせないな…。

「でも普段から下ネタ多いよね」

「いえ、保健体育の復習です」

普段からかよ！ どのみちこうなることは避けられない訳ね。

「委員長…。俺、あんたとは仲良く出来そうだ」

「そうですね。貴方とは同じ匂いを感じます」

クラスと頂点と底辺ががちり握手を交わした。

ある意味奇跡的なシーンに感動すら覚えてしまう。

俺は頭を抱えた。

「知らなかったとはいえ、よく委員長をやってられるもんだ」

「綾って公私混同しないから。その代わり、反動のせいか普段はえげつないけどね」

つまり今は“私”ってか。まだ学校何だから“公”でいてほしいね。

あれ、でも少子化対策がどうこう言ってたような…。

よし、中学生だし、よく分からないってことにしよう。

「バ、バカな…」

おお、原田ですら同様してる。

「この僕が空気だと!？」

知らねえよ！

だったら会話に入ってこい！

「大丈夫、綾はアニメとかにも精通してるわ」

「そうか。なら出番はあるな」

既にこの会話が大丈夫じゃない。出番とか言うんじゃない。

「では私たちはこれで。楽しい山登りと致しましょう」

委員長は時計を一瞥するとそう告げた。もう直ぐ六時間目が始まる時間だ。

「じゃあね」

「おう！」

奥井が手を振り、柏原が応える。別に下校ってわけじゃないんだが。

二人は席に戻ると次の授業の準備を始めた。

切り替えの速さには驚かせられるな。

「何だか楽しくなりそうじゃねえか。プール開き」

「お前は結局胸にしか興味ないのか！」

とツツコミと同時にチャイムが鳴った。

委員長と奥井のためにも、柏原だけは外した方がいいかもしれない……。

第5話・父と原田とお宝本（前書き）

今回は二本立てです。

## 第5話・父と原田とお宝本

よう、俺は統夜の父親だ。せっかくの日曜だし、久々に息子と戯れるか。

そう思い俺はリビングの引き戸を男らしく開けた。

きつと統夜が「朝っぱらからうるさいよ!」というツツコミというをしてくれるはず。あいつのツツコミを聞かねえと一日が始まらねえからな。

……八十年代のマンガだったら背景にトンボが飛んでるぜ。

んなことよりいつまで経ってもツツコミがこねえじゃねえか。まさか反抗期か!?

く、あまりにも楽しそうに俺達がボケるから、ツツコミなんざやってられっか自棄を起こしやがったな…。

チクシヨウ、確かにボケは楽しいけどよ。じゃあ俺の朝はどうなるんだよ!

仕方ねえ。ここは母さんにでも緩くツツコんでもらうか。

けど母さんのツツコミは緩すぎて、イマイチボケだかツツコミだか分からねえからな。

たまにこつちが萎縮すんだよな。

さあ、母さんなりにツツコんでこい!

……今度はカラスが飛んでるかな。もちろん八十年代のマンガなら。

つか静かだなあ。思わず縁側でお茶啜りたくなるぐれえ静かだ。なるほど、つまり…。

家に誰もいねえって訳だな！

チクシヨウ！

一家の大黒柱置いてどっか行つてんじゃねえよ！

と、家族の冷たさを嘆いていると、がちゃつとドアが開く音がした。

「ただいま」

この声は母さんか。誰でもいい、ツツコんでもらって俺は朝を迎えるんだ！

「おかえり！ 早くツツコんで俺に朝を迎えさせてくれ！」

母さんが買い物袋を下ろし、「何言つてんのこの人？」みたいな顔して俺を見る。

「どうして一瞬この人と一緒になったんだろうと考えてしまったけれど……」

中々キツイこと言うな。だがツツコミをもらうまで俺は引くわけにはいかねえ！

「もう昼ですよ」

……………え？

なんということだ。ああ、失敬。僕は原田。誇り高きオタクだ。

何がなんということだなのかと言うと、見たいアニメの時間帯が被ってしまったのだ。二つならまだ良かったんだが、なんと三つも被った。

全く時間帯をずらしてくれればいいものを……。下らない深夜バラエティー番組を放送するくらいなら深夜アニメにしろ！

まあ、あまり多く放送されると捌ききれなくなるんだが。

それに僕ほどのオタクになると、放映中のアニメを全てチェックして神かクソか決める。数が多いと体力的にもたなくなるのだ。あとギラルゲーする時間も減るし。

それより今の問題は三つも重なりやがったアニメだ。

前情報でクソ臭がする方を切るというのもあるが、それは僕のポリシーに反する。

あとでインターネットを見るというのも、犯罪行為なのでやはり僕のポリシーに反する。見逃したらDVD買え！　そして業界に金をばら蒔け！

おっと僕としたことが無駄に熱くなってしまった。

こうなっては仕方ない。文明の利器を利用し、さらに人脈を活用しよう。

秘技！　友達に頼んで録画してもらう！

という訳で早速電話だ。

柏原が妥当だな。

ツーコールで柏原は電話に出てくれた。

「もしもし？」

「ああ、すまないな。今大丈夫か？」

「大丈夫だぜ。どうしたよ？」

「用件は他でもない。被ったアニメの録画を頼みたいんだ」

そして僕は録画してもらいたいアニメを告げた。すると柏原は難色を示す声を上げた。

「悪い、この時間帯は姉貴が深夜ドラマ録っててさ。ちょっと無理っぽいわ」

く、やはり姉の方が権力は上か。あの姉を言いくるめることは出来そうにない。残念だが引き下がろう。

という訳で柏原との電話を切る。次はどうも非協力的だが…、やるしかあるまい。

僕は柳谷に電話をかけた。

「ざけんな」

出るのも早かったが切るのも早かった。説得する間もなかったなあ。

友達なら番組の録画くらいしてくれてもいいのに。  
じゃあ次は…。

ん…？

はは、誰もいないじゃないか。

く、仕方ない。どれか一つを犠牲にするしかないか…。好きなマンガの奴とアニ。ージュで面白そうだった奴にしよう。

そして翌朝。

少し早起きしたことだし、一本見ていくか。  
再生つと。

だが液晶画面に映ったのはジャーニーズ顔のイケメン俳優やアイドル顔の女優だった。

設定ミスったか？

暫くしてタイトルが流れる。

好きなマンガの奴だった。どうやらアニメ化ではなくドラマ化だったらしい。

僕はソッコー消して、夢だったらしいなと思い二度寝した。

柏原だぜ。俺は今林道を舗装された道を外れた、獣道っぽいところを歩いている。同志のタレコミによると、お宝本が目撃情報がこの近辺で報告されたらしい。お宝本ハンターとして見過ごすわけにはいかねえ。早速調査開始だぜ。

っていつても一昨日の雨がまだ残ってやがんのか、地面は微妙に湿ったままだ。こりゃブツを見つけても悲惨な状態かもな。

お、雑誌発見！

これはもしかするともしかするんじゃないか！？

俺は興奮を抑えブツに近付く。そして意を決してブツを確かめた。

「ちえ…。マガ。ンかよ」

どうせならサ。デーかジャ。プ捨てとけよな。読むマンガほとんど無いんだよ…。

しかもグラビアページだけ無いだと！？

許されねえな…。

グラビアページの無いマガ。ンなんて。ガジンじゃない！こんなこと言ってるの俺くらいなもんだろうけど！

そんなことよりお宝本だ。お宝本の前ではマンガ雑誌など無価値に等しい。三大欲求の一つの前にひれ伏すがいいぜ！

「おっ…」

思わず声が漏れる。半裸の女性が表紙の雑誌を見つけたのだ。少年誌の清純な魅力ではなく、まさしく妖艶な魅力。ウヒヒ、同志以外には見せられん顔になってちまうぜ。

さて早速ブツを確かめに行くか。

中々妖艶な上バストが豊満なお姉さんだぜ…。しかし湿ってページが貼り付いてそうなのが残念だ。

ま、とりあえず捲れそうなページだけ捲ってみるかな。

俺は高鳴る胸の鼓動を抑えながらお宝本を手取る。

するとムカデやら名称不明の不快虫がワラワラと出てきた。

「うぎゃあああああああ！！！！！！」

思わずお宝本を投げ出し尻餅をつく。どうやら虫達の隠れ家になっていたらしい。ふと手を見ると、一匹の虫が這っていた。

「っ！？」

俺は手を思い切り振り回しその場から駆け出した。

教訓、雑木林に落ちてるお宝本は触っちゃダメ。

## 第6話・みつくすじゅーす

ども、柏原栞しおつです！　下ネタ大好きな柏原湧の姉って奴だね。

今日もまたバイトが早めに終わったので、弟に何か素敵なプレゼントをしたいと思います。つか何で私こんなに早くバイト上がらせられるんだろ…？　まあ細かいことは気にしない気にしない！　今は弟に素敵なプレゼントをすることに努めなければ！

でも良かれと思ったお宝本移動は逆効果だったし、何がいいのかしら。最近の中学生全く読めないわ…。お宝本追加とかなら簡単に喜んでくれそうだけど、それじゃ芸がないし。

そうだ、オリジナルのミックスジューズとか作ったらどうかしら。そうと決まれば早速冷蔵庫に突撃ね。

私は冷蔵庫の中をガバツと開けてみた。むむ…、中々のスカスカ具合ね。買い物行った方がいいかしら。あ、久々に姉弟水入らずで買い物もいいかも。ミックスジューズプレゼントしてあげるんだから、買い物くらい手伝ってくれるわよね。

さて、材料として使えそうなのはと…。む、ニンジンとピーマンに牛乳かあ。野菜がニンジンとピーマンしかないなんて、ミックスジューズとして致命的な気がするわね。他に何かないかな。

あ、そういやお母さんから補給物資が届いてはず。中身見るの面倒だから、段ボールのまま押し入れに入れちゃったのよね。

というわけで、私は押し入れから段ボールを取り出した。届いて三日くらい経ってるけど、生物が入ってるわけじゃないし大丈夫よね。

かぱつと、いや音的にビリッ！　とかベリッ！　って感じだけど、とにかく段ボールを開けた。

その瞬間、私の鼻腔にとってもない臭気が届いた。  
てか臭い！

超絶にキムチ臭い！

家の一帯が韓国みたいだよ…。

そうだ、これもミックスジュースの材料にしよう！ 牛乳で匂いが消えて、案外いい感じになるかもしれないし！

ついでに韓国海苔と韓国海苔inチョコレートも入れよう。キムチの辛さが抑えられるし。前のスパゲティで辛さに抵抗があるかもしれないしね。

さっすが私、こんな弟想いなお姉ちゃんいるかしら。

早速レッツミックスジュース！

ちっ、最近原田も柳谷も付き合い悪いぜ。放課後の語らいよりもドラマの再放送選びやがって。

まあいいや、俺もドラマの再放送見よ。どうせ帰っても俺一人だし。

「つつ訳でただいま〜」

「何がつつ訳か分からないけどおかえり〜」

ってわおっ！！

何故にまたもや姉貴が居んの！？

「バ、バイトはどうしたんだよ？」

「何かまた早く上がっていいって言われてね」

どうしてこう何回も早く上がらせられるんだよ！

まさかハブ

にされてんじゃねえか？

「まあ細かいことはいいいじゃない」

「全然細かくねえよ！」

親の仕送りあるから経済的には大丈夫だけど、姉貴のポケットマネーには大きく影響すんじゃないの！？

「それより早く来てよ」

「んだよ…」

またお宝本隠したりとか余計なことしたんじゃないやねえだろうな。

姉貴は俺をダイニングへと通した。

「なっ…！」

俺の視線を釘付けにしたのは、ジョッキに注がれた変な液体だった。小学生の時に滅茶苦茶に色を混ぜて作った色に似ている。あと何かキムチ臭い。

「プレゼントフォーユー！」

「いらねえ！」

どう見ても汚物じゃねえか！

「見た目ちよつとアレなのはチョコレート入ってるからよ。きつと甘辛い素敵な味になってるわ」

「甘辛いつてなんだよ！ 醤油砂糖か！」

「いんや、チョコレートとキムチ」

「この匂いやっぱキムチか…！」

学校じゃボケ倒してるっていうのに、姉貴のおかげで家じゃツッコミっぱなしだぜ…。

「まあいいから飲んでみなさいって」

「嫌だ！ …ってそれを俺の口に近づけるんじゃない！」

俺の言葉はバカ姉貴には届かず、どんどん汚物が俺の口に近づいてくる。

「さあグイッと」

「無理だっ！ …ってごぼっ…」

姉貴の狂気を抑えきれず、ミックスジュースという名の汚物は俺の口に進入した。何かどろどろした物が喉を通過していく。ヘドロのど越しって多分こんだなって思う。

味？ もう甘いやら辛いんやら訳分からん。

ただ一言言えるのは…。

「まっずっ…！！」

取り敢えず俺はトイレへと駆け込んだ。

「おええええー」

吐けっ！ 吐くんだ俺っ！ 胃が毒素を吸収する前に出来う

る限り吐き出せ！

いくら姉貴でもマジ身体に悪いもんは入れてねえだろうけど、食  
い合わせつてもんがあるからな。

とにかく今は吐き出すことだけを考える！

と、姉貴がトイレの扉越しに話し掛けてきた。

「ねえ、冷蔵庫空だから買い物付き合って」

で、俺が買い物付き合ってたかって？

もちろんトイレに引き込もってボイコットしたさ。

## 第7話・山登り

柳谷統夜です。まさか二回飛ぶとは思わなかったが、いよいよ山登り当日だ。果たしてこんな視覚的にしか山とオチがない行事で一話持つのだろうか。

そんなメタ発言はさておき、バスに揺られること数時間。俺達は山の麓に到着した。担任、いや委員長の統率力のおかげで直ぐに班に分かれて登山が開始された。本当にうちの担任はダメだな。優秀な委員長がいるからダメになるのか、ダメな担任がいるから優秀な委員長になるのか…。まあどっちでもいいや。

クラス全員を送り出す都合上、俺達の班は最後に出発となった。ちなみに担任は先頭でさっさと行ってしまった。しんがりをさせたらどっか行ってしまいそうだし、適材適所と言える。

「さあていよいよ登山だっ！ 張り切って行こうぜ！」

こんな行事にも張り切れる柏原が本当に羨ましい。俺と原田なんてバス乗ってる時から鬱屈としているというのに。

「くっ…。バカな、僕の足が限界を迎えているだ！？」

バカな、どんだけ体力無いんだ！？

「おいおい、まだ十分も経ってねえぜ？」

これにはさすがに柏原も呆れた。

「最悪バスで休憩という手段もありますが？」

委員長が原田の顔をのぞき見る。

「いや、バスの中で熱射病になるより健康的に日射病で倒れたい」  
前向きなのか後ろ向きなのか分からん。が、原田なりの参加したい意思表示だろう。

「分かりました。倒れたら紗香に運ばせます」

「ちょ、なんで私！？」

「まな板の私より発展途上の紗香の方が嬉しいでしょう」

「確かに！」

柏原が大いに賛同した。そして彼の視点は奥井のある地点に集中する。

「こつち見んなエロガキ」

奥井の冷たい視線が柏原に突き刺さった！

「あ、でも、いい…」

柏原はMに目覚めた！

奥井の柏原に対する好感度だ急降下した。元からあったかどうか疑問だが。

「委員長…」

「何ですか」

「貧乳もステータスだと思うぞ」

こつちはこつちで何言ってるの！？

「…あ、ありがとうございます」

「僕は思うことを言っただけだ」

あれ、何でいい雰囲気なの？

「じゃあ倒れたら、私がおぶっていきます。委員長として…」

「ああ、頼む」

「頼むな！ 男として誇りを持て！」

情けないにも程があるぞ原田！

さて、柏原の方は…。

登山コースの外れの草むらに人間が突き刺さっていた。ちょうど犬○家みたいになっていた。まさかこれが柏原なんてことはあるまい。マネキンか何かだろう。

「や、柳谷…」

尻が俺を呼んだ。最近の尻は言葉を、しかも言語の中でも屈指の難しさを誇る日本語を話すらしい。

「奥井はパワーファイターキャラだ！」

ガバツと起き出して柏原はそう叫んだ。奥井にちょっかいだして学び取ったことは、至極どうでもいいことだった。

そんなこんな話していると、一回目の休憩タイムが訪れた。まあ単にトイレがあるだけだが。

「すみませんが荷物番お願いします」

「へへ、任せときな」

柏原は二人に手を差し出したがあっさりスルーされ、荷物は俺と原田に渡った。

「ちよ、何でよ!？」

思春期の女子として正常な判断に基づいた行動だと思う。

「まあ思春期特有のアレのために匂いを嗅がれるのは、流石の私も嫌ですし」

「しねえよ! 興味はあっても実行しない!」

興味あんのかよ。犯罪者予備軍の台詞だよそれ。

「絶対柏原にだけは渡さないでよ…」

「ああ。任せれた」

奥井に不快感を与えるのも、柏原を変態に昇華させるのも容認しない。我らがマドンナ方が花を摘みにいき終わるといよいよ山登り再開である。どうでもいいが、俺ってこんな芝居かった話し方だっけ？

周りがキヤラ強すぎるから、自分を見失いがちなのかもしれん。

「キヤっ!」

委員長が小さな悲鳴を上げて原田に寄りかかった。どうやら足を取られたようだ。

「大丈夫?」

「すみません…」

「そっか。無事で何より…」

原田と委員長のやり取りを柏原はそれは大層妬ましそうに見ていたそう。

「くそ、どうしてあいつばっか…」

どうやら柏原は原田が羨ましいらしい。いや、確実に羨ましがってる。

そしてその視線が奥井を捉えた。

「転ぶ予定は？」

「私陸上部エース」

あつさり夢は潰えたようだ。

「ゴボウは筆を間違える？」

そもそもゴボウは筆しねえよ。つか筆するってなんだよ！

「ゴボウ……？」

奥井には伝わらず、困惑させただけだった。柏原が言いたかったのはもちろん弘法も筆の誤りである。

そんなこんなで山頂到着。疲労にメーターがあるなら、振り切る寸前である。

「ぼ、僕はベンチで休む……」

元々体力が極貧だった原田だ。無理もない。人並み（だと思いたい）に体力がある俺でも疲労困憊の感がある。

「柳谷君達は原田君の側にいて下さい。私は委員長の仕事をしてきます」

流石は我らが委員長。顔色一つ変えずに前の方へ向かっていった。クラス毎に列べて、そこから記念撮影という流れだろう。

案の定正解でクラス毎に写真を撮っていった。

「何かこういう時って瞬きしたくなるよな」

「ああ、何となく分かるわ」

ただのクラスメイトにしかカテゴリーズされない奴と親交を深めた。

スゴくどうでもいいことで行稼ぎしたところで、お弁当タイムの開始だ。皆思い思いのところにレジャーシートを広げるなどとして場所取りをし始めた。

「ち、やっぱ先に終わったクラスは有利だな」

柏原の言う通り、見渡しのいい場所はあらかじめ埋まっていた。

「委員長権限で何とかならねえ？」

「流石に他のクラスはちよつと…」

え、じゃあ自分のクラスなら出来るの？ そう疑問に思ったが口にするのが怖かった。

「僕としては、景色を見ながらなんて首が痛くなるだけだし、どこでもいいよ」

最高に冷めた発言をありがとう。ロケーションも食を楽しむ重要な要素の一つだと個人的に思う。

「景色がダメならせめて涼しい場所にしようよ」

「そうですね。では紗香の意見を遵守して、あの辺りにしますか。お三方もいいですか？」

「…あ、ああ…」

景色に拘っていた柏原も一緒になって頷いていた。委員長と奥井はあつという間に日陰に入ってレジャーシートを広げた。男の立つ瀬無くすくらいテキパキしてるぜ。

恙無く弁当タイム開始。

これから皆の弁当を解説していこう。  
なんで？

こまけえこたあいんだよ！

ではまず奥井の弁当。唐揚げ、豚でピーマン巻いた奴、ハンバーグ、ハム…。何か肉多くない？

「悪かったわね、男っばい弁当で！」

「いや誰も何も言ってるない」

「ええ？ でも何故か柳谷に失礼なこと思われた気が…」

肉多いとは思いましたが。男っばいは言いがかりだ。

次に委員長の弁当。

ポテトサラダ、ほうれん草のおひたし、レタス、きんぴらごぼう

…。

「ベジタブルだ！」

「はあ、その通りですが。それが何か？」

不思議そうな顔をして俺の顔をじつと見る委員長。

「あ、いや。誰がどんな弁当を食おうが、食生活を送ろうが自由だよん。俺がとやかく言う必要はない」

さて次は柏原の弁当だ。むう、コメントのしょうが無いほど見た目普通だ。柏原らしくもない。

「何ジロジロ見てんだよ？」

「いや、柏原の弁当なら何かあるかなと」

「はあ？　作ったの俺じゃねえし、肉寄り弁当と野菜まみれ弁当が出た今何を期待すんだよ」

言われてみればそうだ。こいつが自分で弁当を作るわけがない。きつとお姉さんが作ってくれたんだろう。

だが事件は柏原が焼魚を食べた時起こった。

「あっつまっ!!!」

思い魚を切り吐き出した。その行方も知らずに柏原は一気にお茶を飲み干す。

「あの馬鹿姉貴何しやがんだ！砂糖と塩間違えちゃったってか？年齢考えやがれっ！」

「お姉さんへの詰問は生きて帰れたらすることね」

柏原が奥井を見る。すると彼女は魚の身にまみれていた。柏原が吐き出した先に奥井がいたのである。

「取り敢えず辞世の句でも読むか…、ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！」

恐ろしく惨たらしいので、俺の心に留めておく。

あ、ちなみに原田の弁当はコンビ弁当でした。

## 第8話・天才とバカは紙一重

中学生には大体二つのタイプの人間がいる。勉強が出来る奴と出来ない奴だ。それが顕著に現れるのが定期テストである。中学一年の時にそこそ良い点数だった奴も、三学期にはボーダーライン（義務教育だし赤点とかはないが）を低空飛行している者も多い。理由としては、部活、やる気などの問題で一夜漬けに成らなずを得ず、結局一夜漬けではどうにもならなかったというものが多い。

そして一夜漬けの敗者が横に二名ほど項垂れていた。

一学期末テストが返却され、ご丁寧に一人一人点数表をくれたのである。これを見れば何の教科が何点だったか一目瞭然。人によっちゃありがたい迷惑な代物である。

「五教科合計二百点弱…。なにこれ新手のイジメ？」

「歴としたお前の実力だよ」

別に教師はお前のことを恨んじやいない。

「な、なんだってー！！！」

柏原は足下から崩れて椅子に寄りかかった。

因みに内訳は国語三十点、数学二十四点、英語三十八点、理科十六点、社会四十八点である。合計二百十六点だ。

「全く、お宝本ばかりにかまけているからそうなるんだ」

「んだと？　そういう原田はどうなんだよ！」

柏原は原田の点数表をひったくった。悪いとは多少思ったが覗き見させてもらった。

内訳は国語七十点、数学五十六点、英語二十四点、社会三十点、理科四十点。合計二百二十点。僅か四点と若干とはいえ原田の方が点数が高い。

「なんだよ、対して変わらねえじゃねえか」

「二百十点代と二百二十点代…。この差は覆らない」

「んだと!？」

二人共無駄にプライドが高い。一触即発の雰囲気の中で、委員長と奥井が現れた。

「どうやらあまり望ましい結果ではなかったようですな」

見るからに頭の良さそうなこの二人にテストの結果を聞くのは野暮だな。柏原と原田を傷つけるだけになりそうだし。

「委員長と奥井はどんな感じ？」

バカかお前は!？　こんな見るからに頭良さそうなのに聞いたら、傷付くのはお前だぞ!

「五教科の合計は四百六十二点です」

「私は四百二十五点よ」

原田は涼しい顔をしていたが、柏原は露骨に精神的ダメージを負っていた。

「バ、バカな…。委員長はともかく奥井は脳筋(脳ミソ筋肉)いいえーいの略)だと思っていたのにつ…」

というか、そんなことをべらべら吐露するもんじゃないと思う。

「そうですよね。私も不思議に思っていました」

「えっ!？　ちょ、嘘よね!？」

委員長にまで言われて焦る奥井。相当パワーキャラが嫌なようだ。

「はーはっはっは!　委員長にその付き人がそのような点数ではいかんぞ!」

おかしなテンションでおかしな奴がやってきた。

彼の名は天野賢児。「賢」という自分の名前にプライドがあるのか、滅茶苦茶テストの点数を取る奴である。

「私の点数は見たまえ!　なんと四百八十点だ!」

天野は誰も聞いちゃいないのにテスト成績表を自慢気に見せびらかしてきた。

ウザい。

「はあ、すごいですねえ。おめでとうございます」

委員長はテキトーにちらほらと拍手をした。

「はーはっはっはっ！　そうだろうそうだろう！」

天野は委員長が投げやりな態度であることにも気付かず高笑いした。

ウザい。

「ウゼええええっ！！！」

柏原は軽く回し蹴りを天野に決めた。

「くっ！　何をする！？」

「うるせえ！　これ以上男キャラは要らねえんだよ！　バラ

ンスを考えろ！」

何を言い出すんだお前はっ！？

「はーはっはっは！　そんなことか！　安心したまえ。私は君たちと馴れ合うつもりはない。委員長と私はライバルだから」

「ライバル！？」

委員長は小首を傾げた。全く意に介していない様子だ。

「すみません、何を言っているのか理解出来ません」

「なん…だと！？」

愕然とする天野。一方的にライバル視していた感じだし、仕方ない。

「まさかライバルという言葉を知らんのか！？」

お前の方がまさかだよ！　柏原でも知ってる言葉を委員長が知らない訳がない。

「いえ、まさかあなたとそのような間柄だったとは…」

「何を言う！　天才たる私に拮抗しうる人物など伊藤綾の他に誰がいるものか！」

どうやら天野が一方的にライバル認定していたらしい。迷惑この上ない。

「はあ。ですが柳谷君も中々のものですよ」

「はあっ！？」

突然の委員長の暴言に思わず吃驚した。

「例えば…これ読めます？」

委員長はルーズリーフに流暢な字で“飛蝗”と書いた。

「飛び…。虫に皇って何だよ？」

柏原はさっぱり分らないらしく、腕を組んで唸っている。天野も口には出さないが、苦い顔をしていた。飛び回る虫とヒントは隠されているんだが…。

「バツタだろ」

「ご名答ですね」

やっぱりか。意気揚々と答えて外したらカッコ悪いからな。

「く。こんなもの、学校の問題には支障ない」

苦虫を噛み潰したような顔で天野は言った。

「でも学校の勉強以外にも詳しいってスゲーよなあ」

柏原がわざとらしくからかう口調で言う。

ちよ、あんまり天野を刺激しないでくれるか。

嫌な予感が…。

「く…、これで勝ったと思うなよ！

伊藤綾っ！

それに柳

谷統夜っ！」

そう言い捨てて天野は去っていった。

っ…

「俺もライバル認定された！？」

委員長は俺の肩に手を置いた。

「まあ、気を落とさないで下さい」

「元凶が何言ってやがるっ！」

くっ、俺としたことが…

「なんてことだ…」

おお、原田も一緒に嘆いてくれるのか！

「あいつ、某ギャルゲーの捨て台詞吐いていった…」

「どうでもいいわっ！」

本当に心底どうでもいい。

つかこんなオチでいいのか？

## 第9話・終業式

どうも統夜だ。期末試験も終わっていいよ夏休み到来である。何故か季節外れ感があるが、きつと気のせいだろう。

終業式での長ったらしい校長先生の話も終わり、柏原原田涙目の通知表ももらった。その際にまた天野がとやかく突っかけてきたが、まあ面倒だからなかったことにしよう。

「はーっはっはっはっ！ 私にかかればオール5など朝飯前だっ！」

まだ何か聞こえるが幻聴だ。前回暴れ回った奴が連続で活躍するなど許されない。

今度こそ天野のことは置いておいて、柏原と原田と俺は、夏休みの計画について話し合うことになった。

「我が世の春が来たぞオオオオオオっ！！！」  
来たのは夏休みなんだが。

「引きこもってゲーム、パソコン三昧の日々を送れる長期休暇こそ、僕の時代、つまり我が世の春だあっ！！！」

意気込んで説明しているが誰もそんなの求めてない。柏原も横で呆れていた。

「ったく分かってねえな……。来たのは夏だぜ原田っ！ 海にプール、花火大会っ！」

おお、珍しく柏原がまともなこと言ってる。

「……などに現れる水着のお姉さんに浴衣のお姉さんっ！ 汗で透けたブラウスっ！ 体操着っ！ 露出度の高いファッションっ！」

全然まともじゃなかったっ！

むしろ超絶に邪だったっ！

「お前らな……。個性爆発させるのもいいが、少しは自重しろ」

俺が溜め息をつくとき、柏原はジト目で俺を見てきた。なんだ、気

色悪い…。

「まあ、無個性の柳谷じゃそういうのも仕方ないわな」  
「んだと…？」

「常識人キャラは確かに重宝するが、パンチに欠ける場合も多い。堅物天然キャラなら、ツツコミも出来て天然ボケも出来たんだが…。まあ仕方ないな」

なるほどなあ。別に天然と呼ばれた覚えもないし、堅物ってほど真面目でもない。確かにキャラとしては中途半端かもな。つて…。

「ほつとけ変人キャラ共オオオオオつ！！！」  
何故にキャラが弱いからって罵倒されなければならんのだっ！

「あらら、珍しいわね。柳谷が怒鳴るなんて」

「本当ですね。あの日でしょうか？」

「男子にあの日もその日もねえよっ！」

反射的にツツコンでいた。これほどまでに自分の気が立っていたと思うと驚きである。

つか部活に委員会と忙しい筈の委員長に奥井が何の用だろうか。

「その日って何ですか？」

「さあな」

勢いで言っただけの言葉に意味は無い。

「それで何か用か？ まさかセクハラしに来たって訳じゃないだろ」

「ええまあ。明日の校外ボランティアの参加人数が足りないんです。端的に言えばゴミ拾いですね。良ければいかがですか？」

柏原と原田が揃って難色を示した。

「おいおい、こんなクソ暑い中ゴミ拾いなんかしたら熱中症でぶっ倒れるぜ？」

とうとう悪態まで柏原はつきだした。まあ確かに俺もボランティアなどごめんだが。

「仕方ありませんね…。柏原さん、こちらへ」

「あ？」

委員長は柏原を手招きして、少し離れたところまで奴を連れていった。一体何だっというんだ？

「こ、これは…」

「ええ、プールの授業中撮った代物です」

「くう」。何故か男女別で授業しやがったから、この目で拝むことはないと思ってたが…」

「参加して頂ければ差し上げますが？」

「マジか！？」

「しっ！ 声が大きいですよ。…で、参加して頂けますか？」

「…ここで断る奴は男じゃないぜ」

「交渉成立ですね」

あ、戻ってきた。こそそと一体何を…。

「柳谷っ！ やっぱ地域の人間として、街が汚れているのは良くないと思わないか！」

「はあっ！？」

意見が百八十度変わってるっ！？

委員長め、柏原にどんな袖の下を渡したんだ？

「全く簡単に買収されて、みつともない」

「なっ！？」 け、決して買収された訳じゃないぜ！？」

原田の落胆に柏原は見苦しいまでに動揺した。分かりやす過ぎる。

「むう…。やはり柏原さんだけでは説得しきれませんか」

「そりゃ、三人の中じゃ一番地位低そうだもんねえ」

「二人共酷くねっ！？」

確かに酷いが委員長と奥井の見解に間違いはない。

「仕方ありません。原田さん。少しよろしいですか？」

「…まあ話を聞いただけ聞こう」

原田はそう簡単に懐柔出来ないと思うが、恐ろしいさを感じるな

…。

「悪いけど、僕はそう簡単に動かないよ」

「それは重々承知です。ですから取って置きを用意しました」

「こ、これは…」

「倒産したゲーム会社の名作じゃないか。オークションでも中々手に入らない代物だぞ…」

「そのオークションで偶々目に止まりましてね」

「無欲の勝利というわけか…」

「参加して頂ければ、無償でお譲りしますが？」

「…伊藤綾、侮れないな」

「では？」

「ああ、参加を約束しよう」

あ、戻ってきた。

「柳谷っ！ やはり地域に住む者として現在のゴミの量は目に余る！ ここは委員長に協力しようじゃないか！」

「はあっ！！？」

原田に至つては別人みたいになつてゐるっ！？

ますますどんな袖の下なのか気になつてくるな…。

「二人がやる気になつてゐるのに、一人だけ嫌なんて言う柳谷君じゃないよねえ？」

奥井が言うように、確かにここで断れば俺の株は底値を割る。まあ賄賂で動かされるより精神衛生上良いだろう。

「分かった、折れてやるよ」

俺は肩を竦めて頷いた。

まあ閻魔の前で情状酌量の余地を作るのも悪くないだろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6419t/>

---

その頃誰もがバカだった

2011年11月15日08時58分発行